診療室

平成22年に発生した口蹄疫

横山自伸†（横山家畜診療所院長・宮崎県獣医師会会員）

今でも，はっきり記憶に残っている平成22年4月20日朝，畜産農業組合連合会からの口蹄疫疑いの牛の電話．私の往診地区からは，数十キロ遠くはなれた都農町山奥であったので，10年前に発生した宮崎市の時の様に，蔓延することなく数頭の殺処分で終息するだろうと，その時は思っていた．

しかし，家畜の移動禁止，消毒ポイント設置などの徹底した防止対策にもかかわらず，日ごとに感染は広がって行った．後に分かったことだが，1例目の発表があった4月20日よりも1カ月前の3月には既に感染は蔓延しており，感染の拡大は発表後による人間，車両等によるものではなかったように思われる．

あの時，話題になったのが県家畜改良事業団にいた県有種雄牛の移動．移動制限地域に入っているにもかかわらず，55頭いた中のエース級種雄牛6頭を安全と思われる東米良地区の山奥に避難させたことである．異例ではあるが，県との協議の末，国が移動を認め，種雄牛を避難させることができた．和牛を飼育しているほとんどの農家が「自分の牛は，移動できないから，殺処分される事になるだろうが，種牛だけは，守ってほしい」，「今度再開するときに県有種雄牛が居ないと，授精に不安がある．」という考えであった．宮崎の種雄牛の能力は，2007年10月に行われた第9回全国和牛能力共進会，和牛オリンピックに2部門で，内閣総理大臣賞を獲得し，総合優勝を果たしたほど，優秀であった．このような実績から，種雄牛の移動について様々な意見があったが，県有種雄牛を作るのに8～10年かかることを考えれば，エース級雄牛を残せたことは，私は大変良かったと思っている．

その後も，口蹄疫感染は広がり続け，5月17日には殺処分頭数が2万8432頭という，ピークに達した．

5月18日には，東国原知事が，宮崎全域に非常事態宣言を発令し，発生農場から，半径10キロ圏内でのワクチン接種が提言され，4月20日の発生以来，診療業務を中止し自宅に待機していた，我々地元獣医師は，5月23日，西都市からのワクチン接種依頼を受け，農家を巡回することになった．ワチン接種は家畜にとって“死の宣告でもあり”殺処分時と同様に，とても辛いものであった．ワクチン接種の時「これは，登録点数の高い牛だ」，「この牛は，セリ値の高い子牛を産んでくれた」，「この牛は，この家で産まれ，今日まで繁殖牛として育てて来た」…など農家の人の話を聞きながら行ったが，とても辛かった記憶が今でも残っている．ワクチン接種は全て終わったものの，殺処分した家畜の埋却地が決まらず難航したが，共同殺処分埋却方式（西都方式）という方法で行うことになった．その方式とは，農家からの「自分の家では牛を殺してもらいたくない」との要望を受け，人家から隔たれた数カ所に連れて行き，その場で殺処分し，深さ約4m長さ40～50mの石灰がまかれた穴に一列に並べるというものであった．ワクチン接種から，殺処分の日までかなりの日数があるため，病畜が出るとワクチン接種牛のみ診療することになった．それまで，診療できなかったため，「獣医師が来てくれなかったので，難産で，親，子牛共に死んだ」，「子牛が下痢で死んだ」という話を聞くたびに心苦しく思っていた．診療することは普通のことと思っていたので，約1カ月ぶりに診療できたことを，これほど嬉しく感じたことはなかった．我々の地区では，口蹄疫の発生はその時点でなかったが，往診前後には，消毒ポイントに何度も行き，診療車を消毒し，防護服は，その都度新しいものを着用し，感染には，十分に注意を払った．

6月に入ってやっと殺処分が始まったが，梅雨時で，大雨，雷の日も数日あり難航しながら行い，その日の終了時には，緊張もあって疲労で困憊した．数日間，殺処分は続いたが，家畜を助けるべき自分が，反対に殺して

横山自伸

—略　歴—

1981年：麻布獣医科大学卒業
同　　年：農業共済組合勤務
1998年11月：横山家畜診療所開業

† 連絡責任者：横山自伸（横山家畜診療所）
〒881-0005　西都市大字三宅4060-21　☎・FAX 0983-43-3158

いるという罪悪感で，眠れない夜を過ごしたこともあった．西都児湯地域で感染を止めるためには，仕方ないと自分に言い聞かせ，殺処分の最中は，何も考えないように気持ちを押さえて行った．殺処分最終日に一番つらかった出来事があった．それは，殺処分終了後に下痢で治療していた子牛と，その家で前夜のお産の介助で産まれた子牛が連れて来られた時である．畜主が花束と生まれたばかり子牛を抱っこして，私に「頼みます」と泣きながら渡された時は，感情を殺していたが，頭の中が真白になり涙が止まらなかった．

最後に，宮崎県内で約29万頭の家畜を失ったが，他県に感染が広がること無く宮崎で止めることができたのは，県外からの派遣獣医師の方々のおかげであると，心から感謝していることを述べたい．